

異世界の本屋さんへようこそ！

登場人物紹介

Main Characters

ジョー

雷竜。
「じょー」と鳴く。

リヒト

アウラ・エル国立大図書館
の司書長。嘘がつかない、
無愛想な堅物。女性が少し
苦手。

ルーエン・ディー

なにかと蓮の面倒をみてくれる
超美形。高い身分を持つらしく、
気品と威厳を兼ね揃えている。
蓮に本屋を作ることを依頼する。

マチガエル

蓮に懐くカエル。
ある能力を秘めて
いるらしいが……

ジャストワ

心配性で過保護な魔術師。
常に肩に小さなカエルを
一匹のせている。

ミカジ

魔槍の使い手である、
金髪碧眼の美人。
姉御肌で、女性には優しく
男には容赦がない。

相葉蓮

ある本がきっかけで突然異世界
トリップした、本を愛する書店員。
中性的な顔や男っぽい言葉づかい
から、よく男性に間違われる。

目次

プロローグ

7

第一章 召喚されました

16

第二章 ただいま準備中

80

第三章 開店です！

188

第四章 異世界の本屋さん

239

エピローグ

296

これは、ある一冊の本に選ばれた書店員の物語――

プロローグ

書店の朝は忙しい。

開店^{オプン}までに、早朝に届いた荷物の中から最低でも雑誌や新刊コミックを並べなければならない。まさに時間との勝負^{マサニ}だ。

ここ『株式会社相葉堂書店^{あいばどう}』は創業八〇年の老舗^{らいせ}で、町内で唯一^{ゆい}の本屋さんだ。雑誌から書籍全般までと品揃えは幅広く、文房具も取り扱っている。

蓮^{れん}は朝一番に出社し、私物をロッカーに入れてさっそくエプロンをつけた。そこへ朝番のスタッフ三名が次々と来たので声をかける。

「おはようございます」

「おつはよーございませう、蓮さん。うわっ、すげえ荷物が届いてる。メインはなんすか」

「婦人誌と新刊のコミック。今日は夕方から混むよ」

「はは。いつもじゃないすか」

スタッフの切り返しに蓮は笑った。腕まくりをして軍手をはめる。作業開始だ。

相葉蓮は三人兄妹の末っ子で、この町で生まれ、ここで育った。物心ついたときから実家である相葉堂書店に入り浸り、女子短期大学を卒業後、家業を継ぐため正社員となった。まだまだ勉強中のいち書店員だ。

兄二人を見て育ったせいかわ、言葉づかいか態度が男っぽく、お世辞にも女性らしいとは言えない。それに加えて身長が一六七センチと女性にしては高い上、胸がなく、髪も短いため、二十一歳になつたいまでもよく男性に間違われている。

ここ、相葉堂書店は家族経営。父は三代目で社長兼店長。母は副社長兼副店長。二人共外商や経理を担当していて、朝は店外に出ているため、もっぱら午後出社だ。ちなみに兄二人は長男がサラリーマンで、次男は海上自衛官だ。店内に『相葉』が三人もいるため、蓮は昔から名字ではなく名前前で呼ばれている。

「荷物入れませう」

日曜、祝日を除き、荷物は毎日トラックで運ばれてくる。書籍はバックヤードへ、雑誌は売り場へ運び、その個数を確認するところから仕事は始まるのだ。

蓮が売り場で雑誌を荷ほどきしていると、バックヤードで書籍の段ボールを数えていた新人ス

タッフの佐藤智紀が声をかけてきた。

「蓮さん、書籍の数が託送書と合わないす。なんか段ボールにも入ってない、頭紙もついていない本と一緒に届いているんすけど……どうしたらいいすか」

蓮は肩越しに振り返り、声が遠くに届くよう大きな声で答えた。

「頭紙がないなら支店からの荷物だよ。もう一枚託送書があるはずだ。どこかに落ちてないかな」

頭紙とは荷物の明細書のことをいう。荷物は大半が東京から配送されてくるが、市内に在庫があればそこから直送で届くのだから。ちなみに本の問屋は取次といい、荷物はそこから送られてくる。

「探したけど、やっぱり見当たらないすね。それにこれ、ビニールパッケージされてないのに開かないし、変な本すよ。客注つすかね？」

客注とは、お客が店にない本を注文して取り寄せた本のことだ。

「どうやらイレギュラーな商品が混じっているらしい。」

「誤入荷かもしれない。わかった、それはあとで私が確認するから、店長の机の上にも置いておいて。先に雑誌を片づける」

「うっす。了解つす」

佐藤は元気がよくて、体育会系のノリが強い青年だ。敬語はどうも苦手なようだが、持ち前の人懐っこさで大目に見られている。言われた仕事をとにかく一生懸命やるので、こちらも教えやすい。ただ、ちよつと仕事が雑な点が気になる。早く慣れて丁寧な作業できるようになればいいけど。

本屋の仕事は煩雑で、整理整頓を心がけていなければすぐに売り場が荒れてしまう。そうなる

売り上げも落ちるし、万引きも増えるので、できるだけきれいに保つことが重要なのだ。

「荷開け終わりましたあー。品出し始めます」

蓮と佐藤は雑誌を売り場に並べていく。最新号や人気雑誌は表紙が見えるよう手前に平積みし、面陳棚には表紙が見えるように立てて置く。見やすく、手に取りやすい並べ方が基本だ。

雑誌が終わったら、次は新刊コミック。

一冊ずつビニールパックして、発売日を記したメモをつけて並べる。今日は人気少年コミックの入荷日。種類も冊数も多いので、もたもたしていると開店に間に合わない。

「雑誌とコミック、全部出しました！」

「ありがとうございます。じゃあ、残っている書籍はあとでやろう」

なんとか開店一〇分前にすべて並べ終えることができた。あとは手分けしてお釣銭を用意したり、売れ残っていた雑誌をバックヤードに運ぶ。

それが済んだら、残るは朝のミーティング。挨拶の練習をして、簡単な申し送りをする。

「以上、よろしくお願いします」

まもなく開店時間だ。今日も忙しくなるだろう。

蓮は、身嗜みをチェックする。この店には制服はないので、基本的に動きやすく、清潔感のある服装ならなんでもいい。蓮はいつも白シャツにジーンズ、スニーカーといった恰好にしている。ただ、全員『相葉堂書店』とプリントされた濃紺のエプロンをして、左胸にネームプレートをつけることになっている。

蓮は最後にポケットの中を確認した。安全カッターにシャープペン、ボールペン三本、メモ、ハンコ、輪ゴム数本。それに軍手があれば準備完了だ。

「一〇時です。開店します」

いつもと変わらない一日が始まる——はずだった。

「いらつしやいませー」

店のシャッターが上がると同時にお客が次々と入店する。蓮はレジカウンターに立ち、開店直後の混雑に備えた。

「おはようございます、いらつしやいませ」

出勤前のサラリーマン風の男性が、月曜日発売の少年コミック誌を片手にまっすぐにレジに来る。

「これちょうだい」

「ありがとうございます。二四〇円です」

次はサンダルを履いた近所の中年男性だ。

「ああ蓮ちゃん、おはよう。注文した本が入ったって電話があったから、取りに来たよー」

「おはようございます。ありがとうございます。本のカバーはおかけしますか？」

接客は、明るく、にこやかに、はきはきと。常に笑顔が基本だ。

蓮の場合は元々人見知りするタイプだったので、それができるようになるまで何年も費やした。

いまでは努力の甲斐あって、『いつも笑顔の頼れるお店の人』という看板を背負っている。

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶は大事なコミュニケーションだ。本屋はただ本を売るだけの場所じゃない、人と人との出会いの場でもあるのだ。

——本は人を幸福にする。

これは亡くなった祖父の口癖だ。どんな知識も邪魔にならないし、共感はず人の輪を生む。輪は縁を結び、縁は絆となり、絆は力となる。その力は店を支え、次代に受け継がれていく。だから本を粗末に扱ってはいけないし、お客様一人一人を大切にしなければいけない——そう教えられた。

「ありがとうございます。またどうぞお越しくださいます」

蓮は丁寧に頭を下げて礼を言った。

時々、気難しいお客もいて、やりきれない思いをすることもあるけれど、それでも蓮は本を介して人と関わる本屋の仕事が好きだった。

「カウンター出ます」

朝一の客足が途絶え、レジが空いたのを見計らって、蓮は書籍の品出し作業をするため、他のスタッフにレジを任せていったんバックヤードに引っ込んだ。

バックヤードでは、佐藤が今日入荷した分の書籍の荷開けを半分ほど終えていた。

「新刊チェック済んでそっちの台車にのせました。品出しよろしくつす」

「もうチェックが終わった？ 早いね」

「そうつすか？」

褒められたことに気がついていないのか、佐藤はニコリともせず黙々と検品を続ける。

蓮が軍手をはめたところで「蓮さん」と呼びかけられた。

「今度、一緒に飲みに行きませんか」

「仕事中だよ」

「ダメつすか……」

露骨にがっかりされると、無視もしづらい。蓮は仕方なく答えた。

「悪いけど、お酒はいいや。誰か他の女の子を誘うといいよ」

「俺は蓮さんがいい。酒がダメなら飯はどうつすか」

なぜ私なんだ、と蓮は怪訝に思いながらも答えた。

「考えておく」

「了解つす」

佐藤は頷くと、なにか含みのある瞳で蓮を見つめてからまた仕事に戻った。

眼でものを告げられても、そこから相手の心の機微を察するというような芸当は大の苦手だった。蓮は佐藤がなにを考えているのかわからないまま、新刊書の積まれた台車を押して売り場に出た。

「いらつしやいます。後ろ通ります、失礼します」

書店の業務は基本、同じことの繰り返しだ。

荷開け、検品、商品の品出し、売行きが悪い本の品抜き、返品、発注。売れ筋商品のピックアップ

プヤランキング調査、映画化やドラマ化した書籍を紹介するフェアの展開もする。更にパソコンでの発注作業に、値段などの書籍情報が記載されたスリップという売上カードの整理、収益の管理。他にも営業担当者との打ち合わせやお得意様への配達、店内清掃に備品管理など仕事は尽きない。だが、やることは毎日同じでも次々と新しい本が入荷になるし、売り場もそのつど変えていく。常に多くのお客に来てもらえるような店づくりをするのは面白い。たくさんのお客に声をかけられることも、もう慣れて楽しみになっている。

品出し中の蓮のもとに常連客の年配の女性が近づいてきた。

「この間、賞をとった本とあなたがすすめてくれた本、どっちも面白かったわよ」

「そうですか、よかったです。では、またなにか面白そうな本がありましたらご用意しておきます」

自分が仕入れた本が売れば嬉しいし、評判がよければもっと嬉しい。それこそ書店員冥利に尽きるというものだ。

蓮が返品分の本を台車に積んでいたところ、手をつないだ親子連れに声をかけられた。

「すみません、探して欲しい本があるんですけど」

「はい、なんでしょうか」

蓮は接客に追われ、売り場を作り、なんだかんだと忙しいまま終業時刻の十八時を迎えた。店の方針で残業は基本認められていないので、今日はもう上がりだ。

明日入荷分の荷物一覧表にざっと眼を通してからタイムカードを押す。

「お先に失礼します」

「お疲れさまでしたー」

蓮は閉店まで残るスタッフに挨拶し、帰り支度をしようとして、ふと誤入荷の件を思い出した。

「まずい、忘れていた」

慌ててバックヤードの一番奥に向かう。店長の机の上を見ると、いまに始まったことではないが、書類や週報で埋もれ、店の住所印や穴あけパンチ、筆記用具に新聞紙までが散乱している。

それらの山の一番上に、問題の本がのっていた。

「これか」

蓮は片手くらの大きさの本を手を取った。装丁は立派で、深紅の革に金文字が刻まれている。おそらく書名だろうが文字が読めない。

ひっくり返して思わず眉をひそめた。妙だ。バーコードがない。ISBNコード——流通している本なら必ず記載される書籍情報の管理番号——も、値段も、出版社表記もスリップもない。

「そういえば、本が開かないとか言っていたな……」

蓮が不審に思いながらも試してみようと本を開いたその瞬間——白い閃光が炸裂した。

「うわっ」

強烈な眩しさに視力を奪われ、蓮は悲鳴を上げて片手で眼を覆った。このとき本を落とさなかったのは、ひとえに書店員としてのプロ意識のためだろう。

そして手を下ろして眼を開けると、蓮の前には信じられない光景が広がっていた——

第一章 召喚されました

—

蓮は走行する列車の通路に立っていた。

車内を見回すと、二人掛けの椅子が等間隔に配置され、車窓の向こうには銀河が流れている。

「——銀河!？」

蓮は叫び、眼を剥いた。

大きな窓の外に見えるのは真つ黒い宇宙空間と星の海。そして青く輝く線路。

「……」

蓮は、すっかり言葉を失って立ち尽くした。

いったいなにが起きたんだろう？ 現実？ 夢？ それとも自分の頭がおかしくなったのか？

額に手をやり考える。落ちつけ、と支離滅裂になりそうな思考の断片をかき集めて、蓮は必死に現状を理解しようとした。

いまのままで店にいたはずだ。仕事のままだし、外に出た記憶はない。確か、誤入荷の本を調べようとして——

「変な……白い、光が……」

蓮は、息を吞んで左手に持っていた本を凝視した。

——まさか、これが原因なのか？

普通ならありえないことにもかかわらず、いまの蓮はなぜかそう直感していた。

いつまでそうして見つめていただろう。だが、不意に耳に飛び込んできた異音に驚き、蓮は飛び退いた。

「イキー」

カエルだ。カエルがいる。

座席の上に親指くらい小さな緑色のカエルがいて、「イキー」と鳴いているのだ。

蓮は面食らって呟いた。

「……どうして銀河で、列車で、車内にカエルなんだ」

わけがわからない。

「まいったな……」

この異常事態に困惑し、蓮は嘆息した。途方に暮れる蓮の目前でカエルは嬉しそうに「イキー」と三度鳴いて、ピヨコンと跳ねた。そして一回転したと思ったら、なんと切符になったのだ。

この変化を不本意にも目撃してしまった蓮は、口を開けて固まる。すると今度は、はきはきとした声が車内に響いた。

「メー、次の停車駅は〈赤い星〉——〈赤い星〉——。お降りのお客様はサメクジラと不機嫌な星



クラゲにご注意をー。次は〈赤い星〉——〈赤い星〉——。メー」

サメクジラ？ 不機嫌な星クラゲ？

はじめて耳にする単語に首を捻りながら、蓮は声が出た方を振り返った。すると、そこに立っていたのは車掌姿の黒い羊。

蓮は哑然とした。頭が真っ白になる。

「羊が喋ってる……！」

「メー。そりゃ喋りますよ。働く羊なんですから。メー」

そんなばかな。

ハンドベルを鳴らしながら現れた羊車掌は、頭に渦巻状の立派な角があり、手足も顔も真っ黒い。顔はまさに蓮もよく知る羊そのもののだが、この羊はきっちり制服を着て、車掌帽をかぶっている。

「……」

人間、驚きも度を超すと感覚が麻痺するものらしい。

いったいなににどう反応し、なにかから突っ込めばいいのかわからない。

羊車掌は眉間を押さえる蓮を見つめると、ハート型の蹄のある手で浅く帽子を持ち上げて言った。

「メー。このたびはライライ銀河線、船列車をご利用いただきましてありがとうございます。乗船切符を拝見させていただきます。メー」

「……切符？ いや、持ってない」

「メー。そんなはずは——なんだ、ここに落ちていますよ。ダメじゃないですか、切符がないと降りできませんよ。気をつけてください。メー」

そうやって羊車掌はさつきカエルが化けた切符を拾い、蓮の手に押しつけた。

「あの、お訊ねしたいのですが」

蓮はカエル切符を掌にのせたまま、羊車掌にそっと話しかけた。

羊が二足歩行をするとか、喋るとか、言葉が通じるのはなぜだとか、この際どうでもいい。

二十二年間培ってきた『常識』をことごとく覆されたいま、逆に腹が据わった。

「私は地球という星の人間で、いますぐ自分の家に帰りたいんです。どうすればいいのでしょうか」

「メー。残念ですが、あなたがお持ちの切符は〈白騎士の星〉行きですよ。あと二つ先の停留所です。他の星へは行けません。メー」

「そんな、困ります」

「メー。そう言われましてもね、船列車の乗り降りには切符に記載されている停留所しかできないんです。ひとまず〈白騎士の星〉へお行きなさい。そこでよき出会いがあれば、きつと帰りたい場所へ帰れますよ。ほら、ごらんなさい。メー」

羊車掌は蹄で窓の外を指した。驚いたことに、宇宙空間に海が出現している。

「メー。晴れの海です。白い点は海渡りのカササギの群れで、彼らは生涯宇宙を旅するんです。あなたも焦らずあなたの旅をして、いまは出会うべき人に出会うといいですよ。遠まわりのようでもそれが一番の近道です。ではお客様、よい旅を。メー」

そうやって羊車掌はポンと蓮の肩を叩き、次の車両に移っていった。

蓮はカエル切符を持ったまま近くの席に座った。なにからなまでに謎だ。謎すぎる。

「……このままだと無断欠勤だぞ。まずいだろう。それに店、大丈夫かな……」

事態の深刻さを考えれば心配すべき点はそこじゃない。

だが蓮は仕事第一主義なので、まじめに明日からの店の営業のことを心配していた。

ふと窓の外を見ると、そこには明るい星、暗い星、小さな星、大きな星。それらが次々と飛ぶように過ぎていく。

「まるで小説みたいだな」

突然、銀河を巡る鉄道に乗車していた少年。友人と共に果てしない銀河を旅する——

あれは物語だが、これは現実だ。

蓮は切符をエプロンのポケットにしまい、本を開いてみた。今度は光らなかったので、ちょっと拍子抜けしてしまう。ページを捲ってみるが、どこも真っ白だ。

そのときだった。

「おねえちゃん、ないてるの？」

不意を衝かれて蓮は視線を跳ね上げた。いつの間にか眼の前に小さな女の子が立っていて、蓮をじつと見つめていた。かわいい子だ。薄茶色のおさげ髪に、それと同じ色の瞳。白いワンピースを着て白い靴を履いている。なぜか片手に空の鳥籠をぶら下げていた。

「……泣いてないよ。ただどうしたらいいかわからなくて、困っているだけ」

蓮は「おねえちゃん」と呼ばれたことに軽く驚きを覚えた。普段、蓮は男性とよく間違われるからだ。初対面の子供にはまず「おにいちゃん」と呼ばれることが圧倒的に多いというのに。

少女は血色のいい頬に手をあて、溜め息をついて言った。

「くーちゃんもこまってるよ。いっしょだねー」

蓮はクスツと笑った。背伸びして、大人の真似をしたしぐさがかわいらしい。

「くーちゃん？ 君の名前かな」

「くりすたりすとふぁーざんととりすたりーのつていうんだよ」

長い。

くーちゃんがいい、と思った蓮は、了解と頷いてから自分も名乗る。

「私は相葉蓮。蓮でいいよ」

「れんちゃん」

女の子は晴れやかな笑顔を見せ、蓮の手元にある本を指差して言った。

「ごほんよんで」

「ごめんね。これは読めない本なんだ。なにも書かれてないから。ほら」

蓮は肩を竦めると、本を開いて見せた。

「ほんとだー。まっしろー」

蓮は本を閉じ、太腿の上に伏せた。この本は普通の本じゃない。あとでもっとよく調べようと心に留めおいて、前方に注意を向けた。

女の子が蓮の向かい側の座席によじ登り、鳥籠を隣に置いて車窓に掌と白い額をくつつけている。ところで、くーちゃんはどのようにして困っているの？」

さつきから親が捜しに来る気配がない。おかしなことだ。こんな年端もいかない子供が一人で車内をうろつくなんて。いや、それを言うなら、そもそも自分が置かれたこの状況がまずおかしいのだが。

蓮がそう訊ねると、女の子は窓の外を見つめたままぼつりとこぼした。

「さがしものが、みつからないの」

「大切なもの？」

「くーちゃんのおおいとりが、どこかにいなくなっちゃったの。もどってきてほしいの。いっしょにおうちにかえる……」

空の鳥籠を持ち歩く理由がわかった。飼い鳥を逃がしてしまったのだ。

女の子の大きな瞳に涙が溜まっていく。唇が震え、泣くのを堪えている姿が痛々しい。

蓮は少し考えてから言った。

「大切なものを取り戻すおまじないがあるんだ。教えてあげようか」

女の子がポカンとした顔で振り返る。

「……おまじない？」

「そう。世界中の友達から力を貸してもらうんだ。お願いしてみる？」

「おねがいしたらみつかる？」

「それはくーちゃんしだいかな。君が心から『戻ってきて』ってお願いしたらきつと通じるよ。これはそういうおまじないだから」

蓮の説明を理解したのか、女の子は真顔でこつくりと頷いた。

「くーちゃん、おねがいする」

「ただ、教える前に一つだけ約束して欲しいんだ。このおまじないはいたずらに口にしちゃいけない。面白半分で使うと皆が怒ってしまうからね」

「みんな？」

「友達のことだよ。怒ると怖いんだ。怖いのはいやだろう？」

蓮の言葉に女の子は少し怖気づいたように顔をこわばらせ、「うん」と呟く。

「よし、じゃあ始めようか。心を込めて、はつきりと、こう唱えるんだ……」

蓮は古い記憶の扉を開けた。気を鎮め、細く、深く、呼吸を整える。

遠い昔、誰かに教えてもらったたたくさんの『特別な言葉』だ。

「——地の友・水の友・火の友・風の友・空の友・魔の友・ダルハ・ディータ・エルザ・トウエルザ・オルム。これは、『皆にお願い。力を貸して、取り戻して』って意味だよ。これで君のお願いが叶ったら、友達皆にお礼を言うんだ。そうしないとせつかく見つかったものが壊されてしまうからね」

女の子はきよんとしている。小首を傾げてもごもごと繰り返す。

「あむた・うる……？」

「もう一度、次はゆっくり言うから復唱しながらついてきて」

蓮の言葉に、女の子はたどたどしくも必死に言葉を紡ぐ。正確に言えるまで蓮は根気よく付き合いい、二〇回以上やってようやく成功した。

女の子は、嬉しそうに蓮に訊き返した。

「これでみつかる？」

「きつとね。もし見つからなかったら——うわっ。今度はなんだ!？」

突然、車両が大きく揺れた。蓮はとっさに女の子を胸に抱えた。次の瞬間、座席から放り出され床に転がったかと思うと、そこは天井だった。いきなり逆さまになったのだ。

蓮は頭を庇ったものの、したたかに背中を打つ。腕の中の女の子はなんだか異様に軽い。

「大丈夫？」

「くーちゃん、へいき」

蓮はズキズキする身体の痛みを顔をしかめつつ、窓の外の様子を窺った。

すると、そこには信じられないほど巨大な軟体動物の吸盤があった。その足がゆつくりと動き、車体に絡む様子を見て、蓮の顔から血の気が引いた。

イカかタコかエイリアンかはわからないが、ともかくあんな化け物に捕まったら一巻の終わりだ。そこへ黒い顔の羊車掌が、黄色いメガホンを片手に慌ただしく駆け込んできた。

「メー！ 緊急連絡、緊急連絡！ ただいま寝たふりハグレイカと交戦中！ 四〇秒後に衝撃砲を発射、緊急脱出します！ 衝撃波にご注意を！ メー。繰り返します——」

寝たふりハグレイカ？

それはなんだと蓮が質問する間もなく、車掌は隣の車両へ飛び込んでいく。羊は意外に足が速い、と妙なところに感心しながら蓮は座席の手すりを握った。女の子も蓮を真似する。

「しつかり掴まっついて」

「うん」

「いい子だ」

蓮はそう言うと、目の前に落ちていた本を拾い、脇に挟んだ。鳥籠とりかごも捜さがしたが、あいにく近くには見あたらない。

そして羊車掌のアナウンスから四〇秒後、衝撃がきた。ピカッと激しい光線が黒い宇宙空間を白く照らしたと思ったら、車体を弄もてあそんでいた吸盤つきの足がズルリと離れる。その一瞬の隙について、船列車がいきなり加速した。上下逆さまの状態も元に戻る。

ひと安心したのも束の間で、今度は猛烈な速さに身体がついていけず、蓮は具合が悪くなった。吐き気と頭痛に見舞われ、座席に横になる。女の子は、気がつけば現れたときと同様、いなくなっていた。

しばらくじっとしていると、次の停車駅を告げる羊車掌のアナウンスが聞こえてきた。

「メー、次の停車駅は〈白騎士の星〉——〈白騎士の星〉——。お降りのお客様はお忘れ物にご注意を。次は〈白騎士の星〉——〈白騎士の星〉——。メー」

降りなければ。

蓮は本を掴み、無理を押しして身体を起こした。頭がグラグラする。立ち上がるうとして、よろけたところに、羊車掌がやってきて助けてくれた。

「メー。大丈夫ですか、お客様。手を貸しましょう。メー」

「すみません。ありがとうございます」

「メー。いえいえ、これも車掌の務めですから。メー」

「そうだ、切符——」

蓮がエプロンのポケットから切符を取り出そうとしたが、羊車掌はかぶりを振った。

「メー。ああいいんですよ、乗り降りするときに見せていただければそれで。また乗るときのために大事に保管しておいてください。さ、着きました。お足もとに気をつけて。メー」

緑に輝く惑星に到着した船列車は、海に突き出た栈橋さんせきの前でびたりと停車した。

「メー。ではよい旅を。またのご利用をお待ちしております。まもなく発車します。メー」

蓮が下車すると、羊車掌は愛想よく笑い、さつと敬礼した。

ポーツと汽笛が鳴る。なるほど、船列車とはよく言ったものだ。いまはじめて外観を見たが、大型の帆船はんせんを模もしている。宇宙そらへと伸びる青い線路の上を走り出した船列車は、みるみると小さくなり、あっという間に見えなくなった。

「……」

眼がかすむ。

強い眩暈めまいを感じて蓮はその場にうずくまった。身体から力が抜けていき、手にしていた本を落と

す。誰かが拾って差し出してくれたが、それを受け取る前に蓮は気を失った。

二

次に蓮が目を醒ましたときはベッドの上だった。

ゆつくりと瞼を上げてはじめに視界に映ったのは白い天井だ。

「マチー」

おかしな鳴き声の方向に視線をやると、布団の上に土色の小さなカエルがいた。またカエルだ。

蓮は驚かなかった。次から次に異常事態が起こったため、カエルの一匹や二匹ではもう驚けなくなってしまったのだ。

蓮は後ろ手についてゆつくりと起き上がり、辺りを見回した。大きな窓がある広さ一〇畳ほどの部屋だ。自分がいるのはセミダブルサイズのベッドの上で、向こうの方に水差しとグラスが用意された小さなテーブルがある。枕元には、あの深紅の革表紙の本が置かれている。

そしてベッド脇の肘掛椅子に座った見知らぬ若い男が、ひたと蓮を見つめていた。

「……」

「……」

相手が口を利かないので蓮も黙る。この間、男を観察してみた。

男は二〇代半ばぐらいで、蓮がいままで出会った誰よりも整った顔をしている。上背があり、肩は広く、足が長そうだ。

身なりも洗練されていた。紋章入りの胸ポケットが左右についた黒服に黒ベルト、シルエットの細い黒のスボンを合わせ、黒いブーツを履いている。指には銀の指輪をはめ、耳には黒いピアス、腰には黒い鞘の長剣を佩いている。さらっとした黒髪に切れ長の黒い眼は冴えていて、どこか人を食ったような不遜さを窺わせた。

偉そうだ。軍人か、為政者か。それとも……？

蓮が眼を逸らさないので見て、男は面白そうに口元をゆるめた。すると、たちまち近寄りたいたい雰囲気失せる。彼はスツと立ち上がり、テーブルに近づいて水差しへ手を伸ばすと、グラスに水を注いだ。それを無言で蓮にすすめてくる。

蓮はためらわずにそれを口にした。喉が渴いていたし、疑ったところで毒入りかどうかなど確かめる術はないからだ。

ごくごくと飲み干すと、男が親切にもおかわりをくれたので、二杯目もすべて飲んだ。

蓮が水を飲んでいられるあいだに席を外していた男は、食事をのせたトレイを手に戻ってきた。それを蓮に手渡し、寛いだ様子で椅子に座り直す。

蓮は少しお腹が空いていたので、ありがたく受けることにした。食べ物で粗末にはいけない。これは幼少の頃から叩きこまれてきた教訓の一つだ。

「いただきます」

男の顔に人懐っこそうな微笑が広がる。笑うと角が取れて、更にいい男に見える。

蓮は黙々と平らげた。やわらかいパンと温野菜のサラダと薬膳風のスープ、どれも舌になじみがない味だ。すごくおいしくはないが、すごくまずくもない。

「うちそうさまでした」

ここは別の星のようなので言葉が通じないとは思ったが、蓮は男に頭を下げて「ありがとう」と礼を述べた。

すると男は、蓮の想像より低く柔らかい声でにこやかに答えた。

「どういたしまして。異世界からいらしたお嬢さん」

蓮は意表を衝かれて眼を大きく開いた。

「言葉がわかるんですか」

男はクスツと笑い、水差しを指した。

「さっきあなたが飲んだのは『言葉水』だよ。一杯飲めば、どんな言葉も自動的に翻訳される。ただし効果は一日だけだね」

「便利ですね」

「この世界ではあたりまえのことだよ。ところでそのマチガエルだけど、あなたの？ もし違うなら外に逃がした方がいい。懐かれると色々不都合が生じるよ」

蓮は、枕元にちょこんと居続ける土色のカエルをちらりと見た。

「別に私のカエルというわけでは——不都合ってどんなことがあるんですか？」

「うっかり彼らの合唱を聞くと判断を間違える。深刻な問題を引き起こしかねないから、飼うなら他のカエルをおすすめするね。それか歌わないように調教するしかない」

だが蓮がいくら追いつくとしてもカエルはひょい、ひょいと跳ねて捕まらない。まるで蓮の傍を離れることをいやがるように。

蓮は仕方なくカエルをつまみだすのを諦め、キリツと表情を引き締めて言った。

「……じゃ、頑張つて鳴くな。合唱するな。わかったか。わかったら返事」

カエルに説教をするなんて、我ながらどうかしている。

だがマチガエルは蓮の念押しに「マチー」と応じた。

この一部始終を眺めていた男は身体を振って笑っていた。どうやら見た目より笑い上戸らしい。彼は親指で涙の溜まった眼元を拭い、含み笑いを浮かべて呟いた。

「今度の〈白騎士〉は変わっているね」

「え？」

「でも悪くない」

男はまるで気に入りのおもちゃを見つけた子供のように、眼を輝かせて蓮をじっと見た。

蓮が不審に思っているところに、忙しいノックが部屋に響く。すぐに扉が開かれ、やや長めの銀髪を一つに束ねた男が怒り狂った様子でスカズカと入室してきた。

「やれやれ、まったくひどい目に遭いました！ 人が珍しく親切にしたというのに、恩を仇で返されるのはこのことです！ ああ気分が悪い」

「そう騒ぐな。具合が悪かったのだから仕方ないじゃないか」

「顔面に二度も吐瀉物をぶっかけられてごらん下さい！ 絶対にあなただだって怒りまくりですよ。ああまだ酸っぱい臭いが……おや、お目覚めですか」

新たに登場した男は指で眼鏡を押し上げて、嫌味たらしい眼つきで蓮を睨んだ。その双眸は深い青でとても美しい。怒気を滾らせる細身の身体を白一色で包み、杖にしては長い棒状のものを手にしている。なぜか左肩に白いカエルを一匹のせていて、涼しい容姿にそぐわないその組み合わせに、蓮は思わず笑った。

すると白服の男は、仁王立ちになって腕を組み、頬をピクピクと痙攣させて言った。

「……ほーお。人にこの上ない無礼を働いておきながら笑いますか」

「すみません」

蓮は丁寧に頭を下げた。船列車を降りたあとの記憶は不明だが、確かに吐いた気がする。男の話しぶりからすると、どうも多大な迷惑をかけたようだ。

「ご迷惑をおかけしました。謹んでお詫びいたします」

「……まあ、わかればいいんですよ。無事でよかったです」

男は渋々ながらも矛を収めてくれたらしく、腕組みをほどいて近くの椅子に座った。

蓮はあらためて彼らを見た。

「はじめまして。相葉蓮と申します」

蓮が挨拶すると、黒服の男が先に、次に白服の男が続いて名乗る。

「僕はルーエン・ディー」

「ジャストワです」

二人の名前を心の中で繰り返し憶えてから、蓮は訊ねた。

「ここはどこですか」

ルーエン・ディーが柔らかな口調で答えてくれた。

「無限銀河三系へ白騎士の星へ、アウラ・エルの国の首都パウラ・フォウにある大病院の個室だよ」
確か、地球のある太陽系は半径六〇億キロメートル。太陽は半径約五万光年、二〇〇〇億の星で構成される銀河系の一恒星。その銀河系も銀河群、銀河団を構成するもっと大きな集合体のひとつにすぎなくて——いったい無限銀河三系って、どこだ。

蓮は、落ちつけ、と自分に言い聞かせてから、とりあえず自分の現状を説明することにした。

「私は太陽系の惑星、地球に住む日本人で、本屋に勤める者ですが、仕事中にこの本を開いたところ、いつの間にか船列車に乗っていました。車内でカエルが化けた切符を拾ったあと羊車掌が来てこの切符ではへ白騎士の星でしか乗降できないと言われたんです。だからやむを得ずこの星に降りたわけですが、仕事があるので早く帰らなければなりません。どうすればいいですか」

ルーエン・ディーはジャストワと顔を見合わせて少し思案したあと、口を開いた。

「太陽系の地球という星には聞き覚えがないな……ジャストワ、君はわかるか？」

「いえ、まったく」

蓮はまたも気が遠くなりそうだった。本当にここはどこなのだろう。

すると、ルーエン・ディーが椅子の肘掛けに頬杖をついて、更にとんでもないことを言った。「あなたの持っているその本だけど、実はそれ、〈白騎士の書〉と呼ばれるいわくつきの魔法書なんだ。本来は国立図書館の王家の図書の間で厳重に保管されているはずなんだけど、それがどうしてあなたの手に渡ったのかな？」

蓮は眼を丸くした。まじまじと手元の本を見つめる。
「なんだって。これが？」

はつきり言ってそれほど価値のあるものとは思えない。なにせ中は白紙なのだ。
ジャストワが厳しい口調で補足する。

「どうもこうも、その本は持ち主を選びます。正統な主人を見つければ、たとえどんなに離れていようとも飛んでいって、この星へ連れ戻そうとするでしょう。それが役目ですから」
突飛な話の展開に頭がついていかない。

蓮は自分の顔を指して「まさか」と疑いつつ続けた。

「正統な主人って私のことですか？」

「その本を開けたのなら、そうです」

ジャストワがそっけなく肯定した言葉に蓮は困惑した。自分の置かれた状況がまったくわからない。
「〈白騎士の書〉を開いてみて」

ルーエン・ディーにそう催促されたときも思考回路は麻痺したままだったが、蓮は無意識のまま

ま応じた。のろのろと手元にある本を取り、最初からパラパラとページを捲っていく。やはり、どこにもなにも書かれていない。

そのときだ。

なにかを見つけた。ハツとして、そのページに指を挟む。

「これは……」

白紙だったはずのページが文字で埋まっていた。飾り枠で囲まれた三行の赤文字の下に、黒文字で赤文字の読み方と注釈と使用上の注意などが記されている。

驚いたことに、その一文は蓮が船列車で出会った女の子に教えてあげた、大切なものを取り戻すおまじないだった。そこには蓮が唱えた言葉が一言一句正確に記載されている。

「……」

よほど不可解そうな顔をしていたのだろう。ルーエン・ディーはひょいと首を伸ばして蓮の手の中の本を覗き込む。

「なにか書いてあるの？ 僕の眼にはなにも見えないけど」

「見えない？ そんなばかな」

蓮はびつくりして訊き返した。こんなにはつきり書かれているのに、なぜ見えないのだろう。

「試してみよう。一度それを閉じて、僕に貸して」

蓮は素直にルーエン・ディーに本を渡す。彼は本を開こうとしたが、びくともしなかつた。次にジャストワも挑戦してみたが結果は同じで、本は頑なに蓮以外の人間を拒んでいるようだった。

「やっぱり僕ではだめだ」

「当然です。それは〈白騎士〉でなければ開けられない本ですから」

「それって……あの、どういうことですか」

いやな予感をひしひしと感じながら蓮は訊ねる。するとルーエン・ディーとジャストワは、いきなり立ち上がった。

「どうということなのか、その本を管理していた人間に訊きに行こう」

「そうですね。彼なら私たちよりはまともな説明ができるでしょう」

「彼、って誰ですか。どこへ行くんです？」

蓮の問いに、ルーエン・ディーは穏やかに答える。

「アウラ・エル国立大図書館。その本が保管されていた場所だ。案内するよ。立てるかい？」

「立てますけど……ちよっと待ってください。右も左もわからない身なので色々教えてもらえるのはとても助かりますが、あなた方になにもお返しできるものがありません」

蓮が申し訳なさそうな表情で呟いたのに対し、ルーエン・ディーは「そんなことか」と微笑んだ。

「困ったときはお互い様だよ。気にしなくていい。それに僕はこれが仕事だから」

「仕事？」

訝しむ蓮に、ルーエン・ディーは陰のある眼を細めて、最高に魅力的な笑顔を見せた。だが蓮は怖気づいた。蓮は昔からどうも生理的に美形が苦手で、近くにいられると気後れし、落ちつかない気分になってしまうのだ。

「僕の仕事はこの国の人々を守り、力になること。いわゆるなんでも屋みたいなものだよ。異世界からのお客様をもてなすことも僕の仕事の範疇だ。そういうわけだから、遠慮せずに頼りなさい」
更にジャストワが腰に手をあて明後日の方角を見ながら、不機嫌そうに続ける。

「……私だって役に立ちますよ。もともと私は〈白騎士〉の親友ですから」

意味がわからず、蓮は眼を瞬かせた。

「〈白騎士〉……？」

するとジャストワにきつく睨まれる。睨まれる理由もわからない。だが彼は説明するつもりはないようで、「ともかく」とふてくされた口調で続ける。

「あなたが望むのであれば、ものすごく不本意ですけど、故郷へ帰れるように協力しますよ」

二人の言葉を聞いて蓮は不意に気がゆるんだ。涙が出そうになり慌てて顔を伏せる。

ずっと気を張りつめていたのだ。

ここまでは理性と自制心を必死に働かせていたが、すぐに帰れないと知ったときには挫けそうになった。取り乱さずに済んだのはひとえにこの二人のおかげだろう。

傍に誰かがいてくれたから、親身になって話を聞いてくれたから、正気を保てたのだと思う。

「ありがとうございます」

涙を堪えて、精一杯の感謝を込めて蓮は呟いた。

ふと脳裡に、三日月の眼をした羊車掌の言葉が甦る。

——あなたも焦らずあなたの旅をして、いまは出会うべき人に出会うといいですよ。遠まわりの

ようでもそれが一番の近道です。

すぐに帰るのは無理かもしれないが、せめていまはあがこう。嘆くのは、あとだ。

蓮は人前で涙ぐんでしまったことが恥ずかしくて、まともに彼らの顔を見られなかった。だから、手元でおとなしくじっとしているマチガエルに視線をやりながら言った。

「お願いします。私を図書館に連れて行ってください」

三

通常、図書館へ行くには路線バスを使うのが便利らしい。

だが閉館まであと二時間を切っているので急ごうという話になった。蓮はルーエン・ディーにうながされるまま、大病院の屋上に移動した。

「今日は天カバを使う。さつき呼び出したから、まもなく来るよ」

天カバってなに。

蓮はとりあえず心の中で突っ込んだ。やがて頭上に大きな影が差したので振り仰ぐと、仰天した。翼を広げたピンク色の謎の巨体が、「カカカカカ」と奇声を発しながら降りて来たのだ。

蓮は我が眼を疑った。ごしごしと擦るが、間違いない——大きなカバが空を飛んでいる。

「……ピンクの翼つきカバ？」

ドスン、と大病院の屋上が抜けやしないかと思うくらいの勢いでピンクカバが着地した。

そのたくましい胴体と短い手足、三角形の耳、愛嬌のある鼻、つぶらな瞳。どれもカバの特徴だが、ピンク色をしていること、胴体部の中央左右に翼がくっついていることが異様すぎる。

それに、生ゴミが腐ったような臭いがたまらない。

思わず尻込みした蓮は後ろにいたジャストワにぶつかってしまった。謝ろうと見上げると、ジャストワもしかめ面をしてハンカチで鼻を押さえている。

「天カバは早くて安全なので交通手段としての利便性は高いんですけど、興奮するとピンク色になって悪臭が増すんです。それに若くて顔のいいお金持ちが大好きなので、ルーエン・ディーに呼ばれるとハッスルしすぎてこの状態……うう、鼻が曲がる。気持ち悪い。あなた、ハンカチはない？ ならばせめて私の後ろに下がっていなさい」

ジャストワが蓮の前に出て盾となってくれる。さりげなく風上に誘導してくれるあたり、親切だ。蓮はさきほどから気になっていたことを訊いた。

「あなたが持っている棒はなんですか」

「魔法の杖です。私は魔術師ですから」

……とんでもないことをあつさりと言げられると心臓が悪い。このままではいずれショック死するかもしれない。この世界はただのいち書店員には刺激が強すぎる。

蓮は変な汗をかきながら質問を重ねた。

「魔術師ってことは、その、魔法が使えるのですか？ 本当に？」

「魔法を使うから魔術師でしょう。もつとも、いまは滅多に使いませんけど」

「……そうですか。えーと、じゃあその肩の上のカエルはなんですか」

「このカエルはただの『ヨミガエル』ですよ」

「ヨミガエル？」

「死者を一度だけ甦らせることができます。自分以外の誰かを、ですけど」

蓮はあまりにも非現実的な内容にポカンとした。まぬけな顔のままジャストワの肩で呑気に寛ぐ白いカエルを凝視する。

「……そんなすごいカエルには見えないけど。異世界には便利なカエルもいるんですね」

「別に便利なわけではありません。死んだ者を甦らせるなんて生命の理に反することですから、当然犠牲が必要です。言っておきますけど、あなたは絶対に飼わないでくださいね」

突然殺気のもつた眼でギロリと睨まれ、蓮は一も二もなく頷いた。

どうやらジャストワは怒らせると怖いらしい。

「なにをしている。おいで、レン」

ルーエン・ディーに名前を呼ばれた。どう興奮を鎮めたのか、天カバの身体はピンク色から灰色に変わっている。悪臭も消えていた。

ルーエン・ディーは天カバについている手綱を握っていた。プサイクなカバに颯爽と跨る姿が無駄に恰好いい。

しかし、踏み台もないこの状態で、どう巨大カバの背中に這い上がれと言うのか。

ルーエン・ディーがスツと蓮に手を差し出した。

「手を」

すると今度はジャストワの腕が伸びてくる。

「失礼。抱き上げますよ」

「抱く？ 待つて——」

蓮がいやと言う間もなく、ふわっと足が空に浮いた。ジャストワにウエストを掴まれて軽々と高く持ち上げられる。そして、ルーエン・ディーに手を引っ張り上げられ、気がついたときは彼の後ろに乗っかっていた。続いてジャストワが蓮の背中を覆うように座る。

「僕にしっかり掴まって。飛ぶよ」

蓮は迷った末、ルーエン・ディーの服の裾を軽く握った。ただでさえ父と兄以外の男性に免疫がないので、身体に触るのはやや抵抗がある。職場を除き、普段あまり接する機会がなかったのだ。抱きつくなんて簡単にできるわけではない。

天カバは短い足でトンツと屋上を蹴り、いきなり高速で移動を開始した。

「わあ」

反動で蓮はぶつ飛びそうになり、思わず眼を瞑った。すぐにルーエン・ディーの力強い手とジャストワのたくましい胸に支えられる。

ルーエン・ディーは肩越しに振り返りながら、意地悪そうに唇の端を吊り上げた。

「だから言ったのに。人の忠告は聞くものだよ。わかっただらおとなしく掴まりなさい」

「……どうも」

なんだか悔しいが、蓮はルーエン・ディーの背中におずおずと抱きついた。動悸が激しい。こんな思いをするくらいなら、変に恥ずかしながら最初に言うことを聞いておけばよかった。

そんな蓮の気持ちをよそに、天カバは速度を落とさず、かつ不安定になることもなく、目的地のアウラ・エル国立大図書館正門前に到着した。

アウラ・エル国立大図書館は想像より遥かに立派だった。周囲を防護壁に囲まれ東西南北に尖塔を備えた円筒状の建物で、図書館というよりは堅固な要塞のようだ。四階建てで、閲覧室は私語厳禁だが、その他のスペースではおしゃべりしても大丈夫らしい。

聞けば、本は国民の共有財産であり、すべて寄贈によるものだという。誰でも自由に本を書いて自由に図書館に置き、それを誰でも自由に読める。貸出システムはなく、本を持ち出すことは基本禁止されていた。

蓮たちは、まず入り口正面の案内カウンターに立ち寄った。ここでは、木製のスツールに腰かけ、片眼鏡をかけた生真面目そうな男性司書が来館者の応対をしている。それが終わるのを待ってルーエン・ディーは話しかけた。

「司書長はどこにいるかな」

男性司書はルーエン・ディーを見るなり相好を崩した。

「ルーエン・ディー様！ こんにちは！ ご健勝のようですね。司書長です。今日は

三階を巡回しております。よろしければ呼んでまいります」

「いや、それには及ばない。自分で探しにいくよ」

男性司書に礼を言ったあと、蓮たちは吹き抜けになっている螺旋階段を上って三階へ向かった。

三階のフロアには全部で一〇の部屋があり、一から八までが読書室、九と一〇は防音完備の閲覧室となっている。

「うわ……すごいな、これは」

蓮は大好きな本がぎっしりと詰まっている空間を見てわくわくした。自分でも眼が輝いているのがわかる。異世界の本ってどんなものなんだろう、と本棚に飛びつきたい衝動を抑えるのにとっても苦労した。

すると、蓮の顔を見たルーエン・ディーがクスツと笑う。

「本が好き？」

「はい」

三度のごはんより好きだ。なにせ生まれたときから本に囲まれて育ってきた。本がなければ生きていけないし、本を読まない人間は絶対に損をしていると思っている。

蓮たちは一の部屋から順番に覗いていき、四の部屋で目当ての人物を見つけた。

「リヒト」

ルーエン・ディーが名前を呼ぶと、部屋の中央あたりに座っていた若い青年が顔を上げた。本の読み聞かせをしていたらしく、彼のまわりには一〇数名の幼い子供たちが集まっている。

「あー！ るーえん・でいーさまだー」

「ほんとだー。るーえん・でいーさまもいっしょにおはなしきこうよー」

わらわらと集まる子供たちに引つ張られるルーエン・ディーと共に、蓮とジャストワもリヒトと呼ばれた青年の傍に座る。

リヒトがやりにくそうにしているのに気づいているのかいないのか、ルーエン・ディーは人畜無害な笑みを浮かべている。ルーエン・ディーは隣に座っている男の子にどんな物語かと訊ねた。

「えつとねー、しろきさんと、らいりゅうがはじめてあつたときのおはなし」

「にんげんにおかあさんをころされて、なっているちっちゃいりゅうをねー、わるいおとなたちがいじめてつかまえようとするのー。ちっちゃいりゅうは、わるいおとなたちからにげようとして、かみなりをおとすのー」

「それがおとなにあたつて、おおげがするのー。おこつたおとなたちが、ちっちゃいりゅうをおいかけまわしてー」

「そこにおとうさんりゅうがあらわれたのー。ねー、はやくつづきおはなししてよー。おとうさんりゅうがきて、ちっちゃいりゅうはどうなったのー？」

子供たちにせがまれて、リヒトは観念したように溜め息をつくと続きを読み始めた。深くて低い、よく通るいい声だ。語り口調が淡々としているせいか、読み聞かせというよりも朗読で、物足りなさはあるものの、つい聞きいってしまう。

物語の後半は、父親の竜が子供竜を庇つて死んでしまい、子供竜も殺されようとしたところで白

騎士が現れ、その命を救う。子供竜は人間を嫌いになったけれど、助けてくれた白騎士とは友達になったという形で終わった。

読了後の反応はというと、ぶんすか怒っている子供が大半だった。

「こどもりゅう、かわいそうだよね！」

「わるいおとなたちがいけないんだよ。おとうさんもおかあさんもころされちゃつて、こどもりゅうかわいそうだよ」

「しろきさんが、わるいおとなたちをやつつけちゃえばよかつたんだ！」

「なんで、おとなたちはこどもりゅうをつかまえようとしたのかなあ……」

そこで子供たちの十八番「なんでなんで攻撃」が、読み手であるリヒトに集中する。

彼はなんて答えるのだろうと、蓮は興味深く聞き耳を立てる。リヒトはさっさと本を閉じて立ち上がった。そして子供たちを見回して口を開く。

「なんでも人に訊けばいいというものじゃない。自分で考えて答えを出せ。おまえたちが悪い大人がいけないと思うなら、そういう大人にならなければいい。子供竜がいじめられてかわいそうだと思うなら、いじめる側にならなければいい。判断は自分でするんだ。わかつたか」

子供たちは神妙そうに次々と頷いた。

蓮はいい読み手だな、と素直に感心した。

「わかつたなら、また次も読んでやる。今日は終わりだ。解散。各自、読んだ本は元の場所にきちんと戻せ。手荒に扱うなよ。本は誰のものだか言ってみろ」

「みんなのものー!」

元氣な子供たちの声が揃う。解散と告げられても、ごねる子供は一人もいなかった。きつと公正な態度が子供たちのわがままや反発心を抑えるのだろう。皆、彼の言葉に素直に従っている。

腰を上げた蓮たちの前に立つと、リヒトはルーエン・デューに踵かかとを揃えて一礼してから言った。

「俺なんの用です」

「そんなに警戒しなくてもいいのに」

「あなたが俺を訪ねて来るときは、なにか問題がある場合が多い。……俺の早合点はやがてんでしたら謝ります」

リヒトはじつとルーエン・デューを見て答えた。

蓮はリヒトの無愛想な横顔を眺めた。端整だが、柔和さや甘さはない。真面目で正義感が強く、あらゆる意味で手強そうな印象だ。芯の強さを感じさせる眼と、一見横柄ちやへいだが礼儀正しさを失わない控えめな物腰で、そう思ってしまうのだろう。

ジロジロと見過ぎたのかもしれない。リヒトは、ルーエン・デューの斜め後ろに立つ蓮へ鋭い視線を向けた。

「それで？ 異世界からのお客人までわざわざ引き連れてきた理由は？」

蓮はギクツとした。どうして自分が異世界人とわかったのだろう。

どこかおかしいところがあるのか、とはじめは焦ったものの、服装のせいかもしれないということに気づいた。白シャツ、ジーンズ、エプロン、スニーカー——店にいたときの動きやすい恰好かっこう

そのままだ。こちらの衣服とは素材も着こなしもだいぶ違う。これでは黙っていても目立つだろう。

ルーエン・デューは穏やかに微笑しながらリヒトに蓮を紹介した。

「アイバ・レンだ。レン、彼はリヒト。この国立大図書館の第一上級司書で司書長を務めている。

館長の有能な右腕だよ」

「リヒトです」

「相葉蓮です。蓮と呼んでください」

リヒトに畏おそまって会釈えいせきされ、蓮もこれに応じる。

初対面の挨拶あいさつが済んだところで、司書の一人が血相変えて駆け込んできた。

「司書長！」

「どうした」

「ご報告が」

司書がリヒトにひそひそと耳打ちする。みるみるうちにリヒトの顔が険しくなっていく。

「わかった。第一発見者はその場で待機、数人を見張りに立てて現場を確保。俺が行くまで誰も部

屋に入れるな。館長への連絡は俺がする」

「はい！」

なにかあったらしい。

顔色を失った司書がルーエン・デューに向かって慌ただしくお辞儀じぎし、飛び出していく。

リヒトはあからさまな動揺はしていないものの、思い詰めた眼をして言った。

「ルーエン・デイー、俺と一緒に来てください。問題が起きました」

名指しされたのはルーエン・デイーだけだったが、ジャストワと蓮もあとについていった。

蓮たちは早足に一階まで降りると、廊下の先へと進んだ。リヒトが腰に下げた鍵束かぎたばから一本を選んで次の扉を開けると、地下へと続く階段が現れた。同時に足元灯が点いたが、それでも辺りは薄暗い。

「足元に気をつけて」

リヒトが先頭に立ち、注意をうながす。

前にいたルーエン・デイーが気遣わしげに蓮を振り返り、手を差し出して言った。

「レン、よければ手を貸そうか？」

「一人で平気です」

「私が後ろについていますよ。危なかったら支えます」

ジャストワが蓮の背後から慥然ぶぜんとして言った。

地下の天井灯を辿るように進み、つきあたったところでリヒトは足を止めた。壁に手を置き、クルツと回転させる。壁面が回転扉になっていたのだ。

一人ずつ回転扉を抜けて見えた光景は、床から天井まですべて一面の本だった。

「すごい量ですね」

蓮は感嘆の声を漏らした。あつちを見てもこつちを見ても、本、本、本——活字の海だ。

リヒトが簡単に説明してくれた。

「ここには貴重な古書や珍本、学者の研究文献などを保管している。出入りできる人間も、館長と俺を含む上級司書に限られている。特に、王家の図書の間は管理を徹底しているから、本が消えなくなるとはならないんだが……」

本が消えた？

更にリヒトは悔しそうに唇を噛み、悲愴ひさうな声を絞り出す。

「申し訳ない、ルーエン・デイー。〈白騎士の書〉が行方不明のようです」

蓮の心臓が飛び跳ねた。

ルーエン・デイーとジャストワは黙ったまま顔を見合わせる。

リヒトは苛立いらだつたような足取りで、王家の図書の間へと向かう。

「あれは特別な本だから特に厳重に保管していたのに、今朝見回りの司書が確認に行ったときにはすでになくなっていたらしい。不審者が侵入した形跡もなく、金庫の鍵が壊されたわけでもないの
で、どうやって盗み出したのか手段がわからない。いや、そもそも発覚した時点ですぐに俺に連絡を寄せばいいものを、黙って館内中を搜索していたよう——」

蓮の背中にいやな汗が流れる。決して盗みを働いたわけではないのだが、うしろめたさでいっぱいだ。

本泥棒と間違われやしないだろうか、と懸念しつつ蓮はおずおずとリヒトへ声をかけた。

「……もしかして、捜さがしている〈白騎士の書〉って、これですか？」

蓮は右手に深紅しんくの革表紙の本を持って掲げる。それを見たリヒトは刺すような視線で凝視ぎょうしし、そ

れが本物だと判断すると、眼を鋭く光らせた。まさに般若の形相だ。

「説明してもらおうか」

下手なことを言えば首を絞められそうだ。

蓮は抵抗する意思がないことを示すために、両手を上げた。

「簡潔に？ 詳細に？」

「ひとまず、簡潔に」

蓮は頷き、自分の身に突然降りかかった災難を話した。

できるだけ端的に説明したつもりだが、リヒトの反応はすこぶる冷ややかだった。

「……ばかばかしい。そんな愚にもつかない話が信じられるか。本が勝手に異世界へ飛んだだと？ それも宇宙を横断して別の惑星まで？ 人をからかうのもたいがいにしる！」

すごい剣幕で怒鳴り、リヒトは蓮の二の腕を力いっぱい掴んだ。

「来い。王家重要書籍窃盗の罪で拘束する。警備隊本部まで来てもらおうか」

やはり心配した通り盗みと疑われてしまった。

蓮はうな垂れて、眼をギュッと閉じた。だいたいリヒトでなくてもこんな途方もない話を信じろと言う方が無理だ。蓮だって、店でなくなった本を第三者がこのこ持って現れたら、十中八九、盗難を疑うだろう。

自分の身の潔白は自分で証明するしかない——でもどうやって？

蓮が問答無用で引き立てられそうになった瞬間、ルーエン・デリーの威圧的な声が書庫に響いた。

「待ちなさい、リヒト。通報など無用だよ。それはレンのものだ」

リヒトが大きく眼を剥いた。ルーエン・デリーを食い入るように見つめる。

「……どういことです」

リヒトの声は震え、上擦っていた。相当混乱しているらしい。

ルーエン・デリーは一度ジャストワを見てから悠然と告げた。

「僕はレンをへ白騎士の書」の正統な持ち主として認めた」

リヒトは「まさか」と叫び、ルーエン・デリーに反論する。

「さっきのでたらめな話を信じたのか？ あなたともあろう方が？ ふざけないでください！」

「ふざけてなどいないよ。もとよりその本は、開くことができる人間のものだ。とはいえ、君もその眼で見なければ納得がいかないだろうから、よく見ていなさい。レン、へ白騎士の書」を開いて」
蓮はルーエン・デリーの言う通り本を開いた。パラパラパラ、と指でページを送る。リヒトは口を開けて啞然としたままその光景を見ていた。

「リヒト」

ルーエン・デリーの発したひと声に、蓮の背筋に戦慄が奔った。強烈な畏怖を感じる。彼はリヒトに向けて微笑み、繰り返した。強烈な畏怖を感じる。彼はリヒトに向けて微笑み、繰り返した。

「納得がいったね？」

反論を許さない圧倒的な凄みにリヒトが黙り込む。

「わかったら、その手を放したまえ」